

原子力と人類の将来

日本山妙法寺沙門 日 達

此題號は去六月十一日、朝日新聞の專欄欄に、湯川秀樹が論說したる處、今此題號に就て特に人類の將來と云ふ問題を深く考へて見度いと思ふ。

秀樹曰く、「一、人間はやむ事は何かもやつて見度くと云ふのが人間の本來的傾向である。ロケットの航續距離が延びると、飛行機で行く計算が始まる。機械が發達すれば手足の働きを機械に代りてやらせる丈では満足しない頭の働き迄も機械に任せようとする。今日の電子計算器は人間とは比較にならなく速さで、而も込み入りた計算をやつてくれる」

抑々人間が母の胎内を出てから生長發育する順序を古來「這へば立て、立てば歩めの親心」と云ふ諺に由て察はしてある。此は獨り親心の希望文では無く一般嬰兒の本來的發育過程でもある。

人間はやきそうな事を何でもやつて見度くと云う傾向が、個人の生長ともなり、又社會の發達ともなることは眞實である。併し人間が生長し社會が發達するにつれて、酒を飲む事も賭博に耽ける事も圓滑する事も、是又やきる事でもあり、やつて見た事でもある、されど要は酒を飲み賭博に耽り圓滑する事に、個人の生長、社會の發達の爲には數々弊害となる。そこで此種の事を禁止せねばならなくなる。禁止せんが爲には道徳律が先行せねばならぬ。

それができる事でもありやつて見度く事でありて、それをやつてはならぬ事があり是を善と云ふ、又反対にそれを是非にやらねばならぬ事もある、是を惡と云ふ、又それをやつてやらねばならぬとあらゆる善與無し事もある是を無記と云ふ、出善惡無記の三大分別は凡そ人間が社會生活を營む所には何れの時代に於ても何れの地域に於ても共通して行はれてある。是を彼等は社會通念と呼ぶ、此社會通念を集成成したるもののが所謂道德律であり、此道德律を實踐を行したる者を聖賢君子と尊稱する。此道德律を尊重し護持する時代は、個人も圓滿に完成し社會も健全に發達する。此道德律を輕蔑し嘲弄し破棄する時代は個人も墮落し社會も混亂する。暴力萬能は其時代の特徴であり殺人破壊は其時代の技術である、機械の中に其時代相を、白刃黒波、圓滑堅固と説く。夫婦離婚や殺人は出来る事であるけれども、現代の社會通念に由て多分に阻止される事ある。

電子計算器や人工頭腦やがここまで發達しても、將又月世界旅行計畫が實現しても、一般人

人類生活に別に喜びを與えるものでもなく不安を與えるものでもない、従て善でもなく惡でも無くむづかしく中性無記の事柄に過ぎ無い。併し高度の科學的技術は必ず殺人破壊に採用されつゝある事が現實である。そうすれば原子力を始め科學の發明の總てが惡魔的大罪を犯す人間の罪惡の淵源總府となる恐が多分にある。科學文明の呪はる所以は此に在る。

現代國際間の戰事に於ては道德律や宗教的禁戒の如きは何等の役にも立たぬ。道德律や宗教的信念に固執する者は、國威と呼ばれ刑罰を被る。結局戰爭の終局の判決は唯勝敗の一點である。戰争をすれば勝たねばならぬ、勝たんが爲には相手の戰爭能力を無くせんとして相手の軍隊をより多く殺害し負傷せしむる事が古來の戰爭常識であつた、然るに第二次世界大戰の終末期に於て我廣島長崎に原子爆弾が投下さるゝに至つて、相手の最弱點たる老若男女を無差別に大量に一瞬に最も機動に、而も大規模に殺傷し都市を破壊する事に由て勝利を收むるアメリカの戰略爆撃と稱する戰法が行はれ、戰爭形態も著しく變化せしめた、現代世界人類共通に戰争の最大恐怖感を持つものは是から始まつた。

一旦原爆使用に興味を覺えたるアメリカは終戦後にも慾々國力を擧げて原爆の製造蓄積に懸命であつた。去五月ビキニ島に於て實驗せられたる水爆の威力、殺人力、破壊力は廣島、長崎に炸裂したる原爆に比して凡そ五百倍にも相當すると云はれる、更に千倍萬倍の威力を有する爆弾を製造する可能性を追求する方向に進んで已まなし、ひとりアメリカのみならず、ソ連も英國も亦俱に向一軌道を走つて居る、人間が出来る事は何でもやつて見度いと云ふ素朴な衝動に駆られて科學を進歩せしめたものゝ、其科學進歩の絶頂に於て、人類生活に最大極度の不幸たる人類全滅文明總破壊の可能性が顯著になつて來た。

人類全滅の可能性を含む核兵器の悽惨なる災厄に對して、最驚愕、最恐怖、最後悔、最焦躁せる者は誰あらう是核兵器を發明し製造したる科學者の一團であつた、先にはアインシュタイン晩年の述懐、近くは昨年七月九日、ベートランド、ラツセルの聲明、同七月十五日、リンドウ謹明の如きは眞ちその證左である。

此の如く世界著名の學者等が幾度痛切なる聲明を發表してゐ、それと由て世界に核兵器使用の恐怖は一向に除かれそれも無く、何となればノ、米、英其他の兩々三々の戰爭財閥は、財閥に雇用される政治家や、戰爭職業人等は、核兵器の威力が一層大規模に最大量に且極端に惨酷ならん事を希望し誇張し快哉を叫んで居るが故である。

原爆投下を相合したるルーベン、及其未亡人、嘗て進駐軍總司令官として日本に來たダグラス・マッカーサーにしても乃至一般アメリカ人にして、彼等は我廣島、長崎に於て彼等が香港へ入し人質と對する大犯罪、大災害を見聞くる。甚も爰をりぬきの如きの如く思ひ立つて是種の

「由て戦争終結を認めたる效果がありたと云て寧ろ之を誇りとしたである。

「科學は何處迄發達してもそれ自身道徳律とは爲づ得ない」と秀樹が云つた。

「科學者どりては唯存在丈があり、意欲も評價も差異も無く又眞理も無く」トイインシューク
ンが云つた。

科學も經濟も政治も將又戰爭も、總て現代文明は道徳律及び宗教的信念に對しては、或は對立的であり或は批判的である。現代文明社會の暗黒面は即ち此に存する。

科學・經濟・政治等現代文明の總てが其奉仕せんとする處は悉く世俗的價値である。宗教道
學が會て嚴重に抑制を加へたる五願六欲の滿足、剝奪的快樂、世俗的幸福を無上に重寶がる爲
、只徒に人間の努力は號ふて生産力を増大して人間の欲望を充足せしむれば、一切の社會惡
解消し現實の社會生活は直ちに樂園化すると云ふが如き唯物論的人生觀を以て、眞實の宗教
德を否認し、反対に經濟生趣、更に交換手段の貨幣を地上の神として尊崇し奉仕し、此時形
神體に信仰的熱情を傾くる、此の如くにして識らず識らずの間に人間の精神的顛倒が發生し
華を誇る近代文明の社會が、一舉にして無間地獄の業火に燒き盡さるゝ危險に直面しつゝあ
・近代文明の「大寵兒」自由主義のアメリカと、共產主義のソ連とが、其何れも露骨なる構
的現實のみ有て、人間の理想の支柱、宗教道德を尊敬する氣風は毫端も見えない。アメリカ
の沖縄軍用地擴張、地代一括拂の强行、日本の軍事基地、砂川、小牧の強制牧用等、ソ連の日
本人捕虜の強制労働、戰爭裁判等は、則ち自ら戰勝者と誇る最大野蠻人、人間から全精神問題
を奪ひ去つた者のみの誇く爲し得る處である。彼等の體内に再び靈魂を呼戻させない限り、彼
等が信仰する科學技術、則ち原子力、經濟政治の各方面から遙るゝ道なき人類全滅の大火坑を
焚付くるであらう。

彼の恐怖すべき原水爆戰争の惨禍は、科學文明の自己崩壊をもたら來らす内面的暗黒の疾疫を
表現する苦悶である。

原水爆戰争は無道徳の社會生活を營む人間の爲に下されたる天罰である。
原水爆戰争は無宗教の社會生活を營む人間が必定して墮落すべき大火坑である。

愛に於て秀樹は嘆息して曰く、

「此の様に考へてみると、我々は絶望的になりそうである。然し、我々は未だ絶望する必要は
ない。今日多くの人々に認められ信ぜらるゝに值する程の宗教や主義ならば、どれ一つとして
人間相互の大量殺戮や、まして人類自滅の行為を肯定するやうなものは無い」

秀樹の絶望感は是正しく科學文明の末路、西洋文明、器械文明とも稱せらるゝ近代文明を一
括して葬り去らんとする弔ひの鐘の響である。科學文明の一切合併は今日を限りに、人間の社會

會生活の指導位置から退陣せねばならぬ。もしなば科學文明が人間の社會生活を指導するならば、人類は當に自滅するより外に生きてゆくべき道は見出されなくてあらう。科學文明に代つて廿世紀後半に登場して人類自滅の大惨禍を救ひ得るものは獨り我が宗教文明であると言ふ點言は、彼科學者が最後に發見したる超理論的結論である。經濟の合理化や正當化を見出す必要がない現實直接の教説である。

近代文明の初頭に掲げられたる標語に、自由・平等・博愛の三がある。出生博愛などは科學にも政治にも經濟にも何所にも見當らない、宗教道德を否定する所に博愛のありやうがない、平等は多數人が少數支配者に對する自由の要求に外ならぬ、そこで現代文明の特色は只管自由に進みし自由を主張する處である。科學も自由の制約から人類を解放せんとして發展し、政治も經濟も總て自由主義の思潮に動かされたるものは、道德・宗教の制約から解放されんことを主張した。自由の一書は道德宗教以上の神聖なる金言とされた、凡そ自由と稱する領域には著を作り自由は即ち道德宗教に連なる所以を以て影を潜め、惡を主張し惡業を爲す自由が眞の自由の如く想はれた、是に於て道德宗教の制約から解放されたる自由の増大とは、則ち人間界に罪惡を増大せしむる説攝に過ぎなかつた。

科學技術をして、政治經濟にして、それらは畢竟人間の希望目的に向ひて使用されるものである。そこで人間の希望目的が道德宗教の制約を遠離すれば遠離する程、唯動物的欲望、肉體的享樂、安易、遊墮、權力、名譽の追及耽溺のみとなる。

近代人が自ら文明人と稱し、科學技術の力を誇る時、同時に其人は最大の野蠻への退歩となれる危険に直面する、原水爆戰争は正に人類の戰爭史上のみならず、世界生物の關係史上の未會有の野蠻狀態の演出である。

娑婆世界の教主釋迦牟尼世尊、住昔中天竺摩訥陀羅王舍城鹿鳴山と於て妙法蓮華經を說法遊られた、其中如來壽量品第十六に、邊に現代末法惡世の相と、其教説の口を說かれた。

「衆生劫盡きて」
「我此土は安樂にして」

大火に燒かる」と見る時も

天人常に充滿せり

種々の寶を以て莊嚴し

衆生の遊樂する所なり

諸天天鼓を擊て

佛及大眾に教す

愚鈍羅刹を而して

我が淨土は毀れおろし

而も衆は燒け盡きて

是の如き悉充满せりと見る」

此文の意は、人間が自ら人間全滅の惨禍を被る可き況はしき時代を作つた。人間全滅の惨禍はノアの洪水に非ずして、無間地獄の大火灾が地上に燃え出て一切を焼盡す處の大火灾であると豫言せられたる經文である。世界を焼盡す火災が起るとは昨日迄誰も信する者は無かつた。今日の原水爆の新兵器は正にそれではあるまいか。

是の大火焼き盡す惨禍を遁れ出る門は唯一門のみ開けてある。此天上地界水中の三界を總て殺人破壊の戰場と見る軍人政治家の邪見を排除して、反對に此國土世間を神聖なる本來の淨土と信じ、衆生の所作は人を樂しましむる遊樂となり、生產は園林堂閣種々の賣となり、淨土の教主大覺世尊と、聽聞の大衆と、其說法の金言とは等しく尊崇せられて、常に花を捧げ奉る莊嚴なる武場となすべきである。此國土世間を離れて、而も淨土の本質的實在を信じ、淨土教主の常住說法を信じ、淨土建立の善惡行を行ふことは、則ち人間の爲には究竟にして根本的な目標を與ふる事である。人間をして肉體的生存の現實から離ること無く而も尊高無上の目標を探求せしめ之に到達せんが爲に永遠の生命を豫想して努力精進せしむるは是則ち宗教一般の活動である。妙法蓮華經如來壽量品に本師釋迦牟尼世尊の大悲菩薩が說かれてあるのが是である。曰く、

「毎日自ら是の念を作す。何を以てか衆生をして無上道に入り、速かに佛身を成就することを得せしめんと」

是が爲に人生生活を價値ある行動を採用せしめんとして、積極的方則として大小種々の制戒を設定し、積極的方則として四弘誓願、六度羅刹の法門を説かれた。左高門財服御返事に曰く、「有情の第一の財は命にすぎず、此を奪ふ者は必三途に墮り、然れば魔王は十善の初には不殺生、佛の小乘經の始には五戒、其後には不殺生、大乘梵網經の十重戒の始めには不殺生法華經の壽量品は釋迦如來の不殺生戒の功德に當り、優品ぞかし、されば殺生をなす者は三世の諸佛に捨てられ六欲天も是を守る事なし」

現代の政治家達が若し此不殺生戒を宗教的眞理でもあり、人間の本質なる價値的行為であると信ずることが出来たならば、彼の原子兵器の如き殺人器を製造せながつたであらう、たゞ製造してお之を戰争には使用せなかつたであらう。又若し世間の人々が此不殺生戒を昇服の如く破り棄てながつたならば、戰爭製造者の策動の餘地を無からしめたであらう。現代の教育は但此不殺生戒こそが超越的價値あるものであることを信受するより外には無い、専横も今更やら是に氣がついた。氣がついた不殺生戒の眞理を如何にして世間に認識せしめ共感せしむべきか、そこに宗教的活動が始まらねばならぬ、科學の分野にはそれがなべ。

不殺生成の眞理を極しめ續しめ破り棄てしめたるものは折騰即見也ぬ。即ちよき者ハシム

競走は優勝劣敗を生み優勝劣敗は弱肉強食の法則を人間の社會生活に導き入れ、殺人行姦など道徳的説明を與く。戰争とも宗教的色彩を以て鼓舞せりるゝに至つた。最近にも亦歐州十字軍など、稀しがある。是に於て社會全體が血とまみれ戰争の火に焼かれねばならなくなる。此邪見の極底に科學が横りてある進化論と稱するものは是である。佛法にては是を眞理と呼ぶ。科學文明がいかにして此不殺生戒を信受するかがせめてあらうか。佛道を信受する者が實直にして慈柔軟になつて平和の社會生活を營むことは當然である。日本國の聖德太子已來奈良朝平安朝の末期迄の天下泰平の歴史は其證明である。此外佛道を信受せざる者、佛道を誤解する者、魔羅堅固の殺人鬼も亦佛學に由て眞理として慈柔軟となり平和の社會生活を營ましめねばならぬ。現代要求する處の教濟は此種の教濟である。妙法蓮華經如來壽量品に曰く、

「我常に道を行ひ 道を行ぜざるを知れ」

度す可き處に隨て 無に種々の恩を號く」

所謂佛道を行せざる者好んで不殺生戒を破り布施波羅密を行ひざる者を「かにして濟度すべきか、觀心本尊妙に曰く、

「今末法の初、小を以て大を打ち擲をして質を破り、東西共に失ひ天地顛倒せり、迹化の四依は隠れて現前せず、諸天其國を捨て之を守護せず、此時地湧の苦難始めて世に出現し但だ妙法蓮華經の五字を以て幼稚に服せしむ、因謗隨惡必由得益とは是也」

天地顛倒は末法の象也「眞理の發生をしてほしと雖も即ち見やむじむ」と說かれてあるが故に、眞實の救濟主たる無數的救主を見失つて、本來市場の交換手段に過ぎなかつた貨幣を以て地上の神と奉る。且て金錢が入豆の交換するが如くを顛倒現象を生じ結局金融資本主義の跋扈に至り、個人も國家も世界も金錢に縛られて自由を失ふ。日本國が米國に追隨せざる所かかかる所以も此金融資本の東洋をなつたが爲である。労働者は機械の奴隸となり資本家は利潤追求の奴隸となりた、文明社會の人民は織て奴隸となりた、文明の甘き酒は人間をして此顛倒の弊病を生ぜしめた。現代人類が正に顛倒現象して大地に統治する體となりた。此解毒劑として妙法蓮華經が末法に留め置かれたる良藥が即ち南無妙法蓮華經の五字七字である。法華經に曰く、「是の好き良薬を今留めて出で在し」。

汝等取て服すべし 織えじと漫ふる事勿れ」

不殺生戒をも持たず、布施をも爲せず、但南無妙法蓮華經と口に唱ふる計つては、しかしながら我が佛ともなり、此世界が淨土となることが出来ようが、是は誰ひでも當然想ひ難いである。此疑問に對する解答は、但口に南無妙法蓮華經と唱ふる事のみである。口に南無妙法蓮華經と唱ふれる者には斯くて南無妙法蓮華經を唱がしむる事ぢやる。口を離れて南無妙法蓮華經

を聞く耳を塞ぐや南無妙法蓮華經を聞かざる者の爲にも大慈大悲釋迦なく更に南無妙法蓮華經を曰ひ思へ且つ聞かせねばなり」。薬谷入道許御書曰く、

「今は既に末法に入て在世結縁の者は漸々に衰微して権貴の11歳童衆類あり、彼の不輕菩薩末法に出現して毒鼓を擊たしむる時也」

南無妙法蓮華經の聲、大法の聲の音は、文明中華の衆生は之を嫌ふて却て毒藥の想を爲すが故に南無妙法蓮華經を説いて法輪の音を宣傳する。萬葉圖を唱へ法鼓を擊り者を怨嫉して罵罵打擣する、法蓮華經の行者に對する川原の強敵は、忽然として出所に詠ひ起る、三類の強敵を忍んで毒鼓を擊つ者は尋常ならぬ大慈悲心を要する。萬葉曰鑑大聖人の御慈悲廣大なるが故に我身に南無妙法蓮華經を唱ふる事が出來た、教主釋尊の大慈悲に由ればこそ如來の因行果徳の三法を妙法五字の言葉に裏んで末代幼稚に贈て頂いた、是は我宗教的信念である。釋迦牟尼世尊の金口の梵苦聲が此娑婆世界に於て一切衆生の爲にじかに廣大にして永遠の年月に亘て救濟を施したるがは亦見外道も餘地は有るまく、今日なお朝香經文歸持の聲は家々の佛壇に傳じて民衆精神生活の平和の指針となつてゐる。釋尊一代五十年說法の中の慈窮究竟の說法、三世難佛出世の本懷と稱せられたる妙法蓮華經の五字、いかでか末代五過頭倒の精神病を全治せしむる事能はざる可き、是母良藥の功能も鮮明であり、人間の顛倒症狀の診斷も的中し、末代救濟の御使四依の苦難の出現も紛々方なく出現し給ふた、南無妙法蓮華經の比一言の聲が現代文明崩壊を救ふ可き唯一の人間世界への約束である。

不殺生戒も布施波羅密も其譲頃を掲げた文では人を教ふ事は出来ない。それだけでは死も法律の條文と大差は無い、不殺生戒も布施波羅密も元來形式的の拘束ではなくして精神的の活動である、是を放體と呼ぶ、戒體を無表色とも無作とも稱するは是が爲である。無表無作の戒體を發起せしめんが爲に此身口意三業の作法繫縁を廢する。

南無妙法蓮華經は三世諸佛の戒體である。法華經に「火名持戒」と說かれである。南無妙法蓮華經は一切衆生成佛の戒體である「是人佛道に於て共守して疑有る事無し」と說かれである。

「南無妙法蓮華經は文に非ず義に非だ一部の意のみ」と曰蓮大聖人は說がれた。

本來常に眞の寂滅相の心の戒體を一貫の秘密の法にせんじ人間世界に付属せらるべたるものが則ち南無妙法蓮華經の表現である。南無妙法蓮華經の表色言聲に由て、南無妙法蓮華經の無表色の戒體を獲得するが故に、我等衆生の成佛の爲め此放光の開顯も信じて信せらるゝ所以である。

れて高度の科學技術も、科學技術を採用する自由主義と共産主義との政治も經濟も、人間の田園全滅を救ふ方法は、彼等が其主張する主義である無く、其製造せる新兵器による無く、是等近

代文明から全然不必要と觀られ、徒に過去の骨董として顧られ無かつた道徳律、道徳律の拘束し能はざる罪惡を轉變し清淨化する宗教、其宗教的信念以外に人間の自滅を救ふ道は見出されない。

科學技術が原水爆を發明し、民主政治國が原水爆を戰爭殺人に使用したる事に由て、人類界に於ける是非善惡の論議が忽世界の大問題となつた。

終戰後アメリカはインドの首相ネールを招いて講演を講じた。ネールは其講演の中に、

「インドは大なる誇りを以てアメリカ國民に告げんと欲するものがある、則ちインドは原水爆を製造せず且又之を使用せぬ」と云ふ事である」

原水爆装造と使用とは人間文明の大なる恥辱である、アメリカは永久に此恥辱を雪ぐことは出来ない、是が道徳律の批判である。

最近ソ連の最高會議は、原水爆實驗禁止の日本國議會決議の實證に賛同し支持する旨を發表した、引續て英國の首相も同様の意見を演説した。

アメリカの大統領候補スチーブンソンは數ヶ月前に已にアメリカ自身先づ原水爆實驗禁止を勧行して、ソ連英國を之に勧説すべきであると聲明した。ひとりアメリカの現政府と日本の現政府とは未だ原水爆實驗の功効を認めておらず、實驗禁止には不賛成である。

此の如く核兵器戰争の構想は、戰爭の勝敗を超越したら道徳律と適合しない點ることが判然した、道徳律は實證面の規則である、其規則を守らるゝは彼の心の良きと被る無良きの不殺生の戒體の活動に依るものである。道徳ニ宗教とは各別の領域に在り乍ら兩者一體的な生命を保つておる事を知る可きである。宗教的信仰とは共产主義者の言ふが相を個人の「私事ではない」、現代文明の暗黒を照らす大聲明である。宗教に由る眞理の轉變の時代では、主義人道的根本的禁斷は科學も經濟も政治も未だ會て注目せなかりて我が人類文明の文明である。殺人罪の根本的禁斷は人類全滅を救はんが爲を是非につけて採用せねばならぬ而して實務経営科學の總面積に擴がる大問題である。

南無妙法蓮華經

惟時昭和元年太字八月六日